

## 就学後のABA

2014.2.2 神戸定例会  
藤坂龍司

はじめに～就学が終わりではない～

早期療育に取り組む親にとって、小学校入学は大きな目標であり、ゴールである。小学校で普通学級に入れば「勝利」であり、入れなければ「敗北」であり、「終わり」だと思いがちだ。

そのため、就学が近づくにつれて焦ってしまい、かえって何も手に着かなくなったり、落ち込んだりしてしまう。

しかしいざ子どもが小学校に入ってしまうと、それが「終わり」ではなかったことに気づく。それは実は新たな「始まり」なのだ。

子どもが残念ながら特別支援学級や支援学校に行くことになったとしても、まだまだ親が教えられること、教えなければならないことはたくさんある。その教育に、引き続きABAは有効だ。

また子どもが無事普通学級に入学を果たしたとしても、それが決してハッピーエンドではない。たいていの場合、子どもは何か問題を残している。それは学業の問題だったり、社会性の問題だったりする。適切にフォローしてやらないと（あるいは適切にフォローしても）、子どもは途中で学業について行けなかったり、友だちができずに孤立したり、いじめられたりして、最後には登校拒否を起こして自宅に引きこもってしまうかもしれない。

そこで今回は、そんな就学後のABAの主な課題を取り上げることにしよう。

<発達レベルによる違い>

就学後を取り上げることの難しさは、この頃になると子どもの発達のレベルが最重度から高機能まで差が広がり、共通の課題が少なくなることである。

以下は、知的に重度、中～軽度、高機能のそれぞれの子どもたちにとってどんな課題が必要かを図にしてみたものである。○は必要なもの、△はそれほどでもないもの、を表している。

	重度	中軽度	高機能
社会性	△	○	○
アカデミック	△	○	△
身辺自立	○	○	△
問題行動	○	○	○

<学校の活用>

小学校に入ったら、つみきBOOKもつみきプログラムも就学後の課題をカバーしていないし、何をどうやって教えたらいいか、不安だ、と言う声をよく聞く。

しかし小学校に入った後の課題の組み立ては簡単なのである。基本的に学校に合わせればいいのだ。

小学校ではアカデミックスキル（読み書き算数）だけでなく、生活・作業スキル（図画工作、家庭科）、運動スキル（体育）、余暇スキル（図画、音楽）まで幅広く教えてくれる。また学校はそれ自体が一つのミニ社会であり、そこで生きて行く上で、いやでも社会性スキルが必要になってくる。

だから小学校に入ったら、学校の勉強の予習復習を中心に、学校生活で必要となることをその都度教えてあげればいい。それがそのまま、将来の生活の自立のための訓練になる。ただし学校では必要とされないが、将来的に必要なこと（買い物スキル、交通安全スキル、入浴スキルなど）もあるので、それは適宜補っていく。

## 1. 問題行動への対応

小学校入学の時点では落ち着いていても、入学後の長い学校生活の中で、問題行動が再び繰り返したり、新たな問題行動が出てくることはよくある。かんしゃく、攻撃、破壊、奇声、登校しぶりなどである。

### （1）原因

原因はいくつか考えられる。

①家庭でABAセラピーが中断し、問題行動に対する消去などの対応もいい加減になったため、問題行動が悪化する。

②小学校に入ると、一日の長い時間を学校の先生に委ねざるをえなくなる。そこで学校の先生の誤った対応の結果、問題行動を強化されてしまい、状態が悪化する。

③学校生活には、これまでにないストレスがある。学業についていけない不安、膨大な待ち時間、同級生によるいじめなど。その結果、家庭で反抗、攻撃、破壊行動が起こったり、登校しぶりから不登校に発展したりする。

④小学校高学年以降、思春期の胎動なのか、子どもがよく興奮するようになり、大声、奇声を出したり、暴れたりするケースがある。

### （2）対応

まず知的な遅れが残っている場合は、家庭でのABAセラピーを継続した方がよい。知的に軽度から中度の場合はアカデミックスキルを中心に、重度なら初期課題を中心にする。それを通じて親が子供の状態を把握し、コンプライアンスを維持し、新しいことを習得することによって感じる喜び、達成感、自尊心を常に与え続けることが大切だ。また生活の中でも引き続き、問題行動に対して消去、DRO、消極的罰などの対応を取り続ける。

ただし強く叱ったり、たたきなどの体罰に頼ってしまうと、学校ではそのような対応をしないので、学校での行動が余計に悪化することがある。親がいないところでも問題行動を抑えるためには、強い罰に頼るのではなく、制止や弱い強化でのコントロールに留め、環境のギャップを小さくする必要がある。  
＜学校との連携＞

面談、電話、連絡帳などで担任の先生と緊密な連絡を取る。ただし余り高い要求をしてうるさがられてはマイナス。先生に対しても常に感謝と肯定的な評価を伝えて、よい関係を築いておくことが大切だ。

そのうえで、問題行動に対してできるだけこちらの望む対応を取ってもらう。ただし教師が考えた対応を頭から否定するのではなく、一緒に考えて行く姿勢が必要だろう。

「がんばりノート」を作って、毎日、子どもの目標を3、4つ書いておき、それが達成できていたら先生に○をしてもらう（若しくはシールかハンコをつけてもらう）。先生はそれをつけながらほめてくれるだろうし、親も帰宅後それを見てほめることができる。



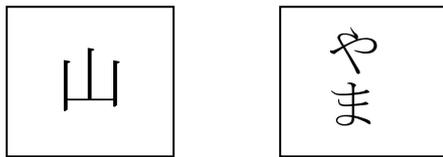
かけ算は足し算引き算より簡単である。2×3は2を三回足すこと、つまり2+2+2、と教えよう。理屈がわかったら、あとは九々を暗記させればよい。

割り算は掛け算の逆なので、これも簡単だ。3×□=6、という問題の□の中を考えさせる。それができたら、6÷3=□ は3×□=6 と同じだと教えよう。「3に何をかけたら6になるの？」と口頭で聞いてもよい。九々を覚えていれば「さんにかろく」とすぐに出てくるはずだ。

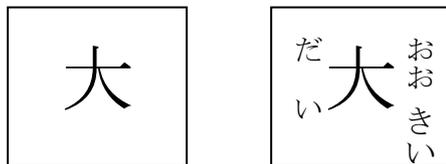
難しいのは文章題の理解。絵を描いて理解させる習慣をつけるとよいだろう。基本的な例題をしっかり理解させたら、それと類似の問題をたくさん作ってやり、理解を般化させる必要がある。学校や市販のプリントをやらせるだけではだめ。

<国語>

漢字は意外と覚えやすい。DQ60前後でも、ABAの教え方を用いれば習得可能である。ひらかなに続いて、年長でカタカナを習得したら、小学校に入学してすぐ漢字を教え始めよう。厚紙の表に漢字、裏にひらがなを書いた手製のカードを作るとよい。最初はひらがなの面を表にして選ばせ、次に漢字の面を表にして選ばせる。分からなくなったら自分で裏返しさせる。



複数の読みがある漢字は、表に漢字を、裏に漢字とその読みを書いておく。



問題は長文読解だ。読解には登場人物の心の理解が必要となってくるので、高機能でも自閉症の子にはむずかしい。「それ」は何を指すのか、というくらいなら、心の理解がなくても大丈夫なので、そのような問題を中心に、解き方のテクニックを教えてあげるとよい。

知的に遅れがある場合は、まして読解は歯が立たない。無理をせず、実用的な文の読みと簡単な日記書きくらいにしておこう。

### 3. 身辺自立

<積み残した課題>

小学校に入るまでには服の着替えは自分でできるようになっていた。もし入学までに間に合わなければ、なるべく早くこの課題に取り組む。

トイレトレーニングが就学までに間に合わなかった子は、ゴールデンウィークか夏休みに、不転の決意で取り組もう。「学校がやってくれる」と思わないこと。できていない子は中学に入ってもできていない。

### <プロンプトを受け入れる姿勢>

身辺自立や運動スキルについて、親が手を貸そうとしても「ぼくがする」と嫌がって拒否する子どもがいる。高機能児に多いようだ。これは一種の成長なのだが、これを認めているとプロンプトができな  
いので、いろんなことが習得できなくなる。小さいときからプロンプトの拒否は認めないこと。しかし  
最後は自分である程度できるようにしてやり、本人のプライドも満たしてやる。そうすれば、プロンプ  
トを受け入れ、しかもなおかつ自分でできることにプライドを持つ子にすることができる。

### <小学校入学後の身辺自立課題>

小学校入学後の身辺自立課題としては、入浴スキル、買い物スキル、外出スキル、電話の応対などが  
あるだろう。

#### ○入浴スキル

小学校高学年になると、たいていの学校では宿泊学習の機会がある。それまでに出来るだけ、身体を  
洗う、頭を洗う、身体を拭くなどの入浴スキルを身につけておこう。

その際、チェイニングの手法が役に立つ。例えば身体を洗うスキルは、  
濡らしたタオルに石けんをつけた後で、

- ①首をこする
- ②左肩をこする
- ③左腕をこする

・  
・  
・

- ⑬おしりをこする
- ⑭背中をこする

というステップを踏んでいる（細かな順番は個人ごとに違う。あなたの洗い方に合わせればよい）。  
これを最後のステップから遡ってプロンプト&強化で教えて行く。「くびー、かたー、うでー」などと  
口で言いながらこすらせると、覚えやすい。ちなみに腕は4つのステップに分けてこすらせる（上腕外  
側、下腕外側、下腕内側、上腕内側）。だから「うでー、うでー、うでー、うでー」と四回言わせる。

視覚に強い子どもなら、洗う順番を書いた紙に防水処理を施しておいて、お風呂の壁に貼っておいて  
もよい。

#### ○外出スキル（交通安全）

発達レベルによるが、軽度以上の遅れがある場合、自分で信号を判断して安全に渡るのは難しい。ま  
ずは

- ①手を離していても大人のそばを歩くこと
- ②先に行く場合でも車道を渡る場合は、歩道の端で必ず止まって大人を待つこと
- ③大人が来たら、大人と一緒に渡ること

を教えた方がよいだろう。

教え方はプロンプトと強化、それに言うことを聞かなかった場合の多少の罰である。例えば少し先を  
歩かせて、「ストップ」の指示で必ず止まる訓練をする。止まらなかったら強く叱って、その場で何度  
か練習を繰り返す。「ストップ」で止まれる自信がついてから、歩道の端まで先に行かせる。止まれた  
ら心からほめること。

### <余暇スキル>

遊びが乏しい子どもの場合、余暇をどのように過ごすかが課題になる。することがなければ、自己刺激やいたずら、他害、自傷などにふけりやすい。一説によると、余暇スキルの豊富な子どもほど、思春期になって情緒が安定しているそうである。だから適切な余暇スキルを身につけさせることがぜひ必要だ。

#### 余暇スキルの種類（おもちゃ遊び以外）

自習プリント	運動をする
字を書く	絵本や図鑑を見る
絵を描く	折り紙をする
動画を見る	パズルをする
携帯ゲームをする	W i i をする

## 4. 社会性スキル

社会性には二つのレベルがある。

第一レベルの社会性とは、大人やお友だちの指示によく従うこと、お友だちの動きをよく観察してその動きをまねすること、思い通りにならなくてもかんしゃくを起こさないこと、などからなる。

これはABAの初級課題で身につけることができるので、それを過去の課題にせず、常に復習をし、コンプライアンスのよい状態をキープしたまま就学を迎えることが大切だ。これができるいさえすれば、たとえお友だちと遊ばなくても、普通学級でトラブルなく過ごすことができる。

第二レベルの社会性とは、お友だちと楽しく遊べたり、会話を楽しんだり、友人関係を築くことだ。多くの高機能自閉症児にとってこれこそ最後の高いハードルとなる。

この点に関して親ができることは、①環境づくりと②スキルづくり、③その場での援助だろう。

#### ①環境づくり

友だち作りを直接手伝うことは難しいが、友だちを作りやすい環境を設定してやることはできる。例えば、入学する小学校が決まっているなら、そこに入学する子どもが多い幼稚園や保育園に早くから入れておく。そうすれば小学校に入っても、あなたの子どものことをよく理解してくれるお友だちがたくさんいることになる。また、クラスより結束の強固なサッカークラブや少年野球チームなどに入れるのも一つの方法だろう。要はあなたの子どもにとっての人的資源を作っておくことが大切なのだ。

#### ②スキルづくり

関わり遊びを直接指導できなくても、関わり遊びの仕方を教えることはできる。ドッジボール、サッカーなどのスポーツ、おにごっこ、色おに、高おになどのゲームの遊び方を家で教えておくとよい。

お友だちとのコミュニケーションが苦手なら、その練習をさせる。例えば友だちの輪に入るのが苦手だなあ、と思ったら、その練習を試してみる。家族や親せきの子どもなどの協力を得て、その場面を再現し、上手な入り方をやって見せ、まねさせる。いろんなシチュエーションを用意するといいたろう。近くにSSTの教室があれば、それに入れるのもよい。

#### ③その場での援助

どんな環境づくりも事前学習もその場での援助に勝るものはない。放課後の公園やお友だちを招いてのプレイデートなどの場を活用して、あなたの子どもに「コーチ」としてその都度指示やアドバイスを与え、お友だちとのコミュニケーションスキルを育てて行こう。